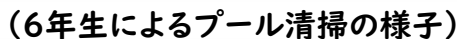




令和6年7月1日
大原小学校校長
文責 山内 哲也

今年度も安全を第一にして、各自のめあてに向かって努力して欲しいと思います。



6月14日に交通安全教室が行われました。交通安全教室では、登下校中の間違いさがしをしたり、横断歩道の正しい渡り方を実際にやったりしました。この時期は、低学年を中心に交通事故が増える傾向にあります。ご家庭でもご指導をお願いします。



6月12日よりひまわり教室が始まりました。本校では、3・4年生を対象に、水・金曜日の放課後に実施しています。学習内容は、算数の宿題・授業の復習や基本的な学習をしています。指導員の指導の下真剣に取り組んでいます。

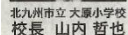


6月14日に女子ネーションズリーグ福岡大会のセルビア対フランス戦を観戦しました。また、試合後に選手たちに花束を渡したり、ハイタッチしたりと直接触れ合うこともできました。子どもたちは、直接選手たちと触れ合うことができ大喜びでした。



学校の歴史や校歌・校章の意味、マスコットキャラクター「ばるっち」の誕生秘話などがインタビュー形式で載っていますので、是非一度読んでみてください。

※裏面に続く



児事こち

について教えて！
 キヤラクター名は「ぼるっ」といいます。
 のキヤラクターは、50周年
 業の際に当時6年生の女子
 童によって作成されました。

先生を尊上級とした「上級生」を輩出した。また、学校（６、７年生）の学校として開校した。

開校以来、「よく、やしく、ためましく、心ゆくまで」に活動した。その中で、女子校の教育を、女子校の教育目標として、多様な学習生活や、余餘活動を通して、児童一人ひとりの持長や可能性を伸ばす教育活動を推進して

〇校長について教えてください

校長は、「町上津波」下上津波でも、全国どこでも津波にもならない、大原しかないだろうと決まらず、臨み方ないで、おかしなことをおぼろけの中、おぼろけを奮起して、おぼろけに決まりました。

校歌
 山田 重雄 作詞
 本野 武雄 作曲
 「かたやうかかやうか陽に映る
 楓林もさかやう輝びかける
 いともさかやう輝びかける
 さだささかやうあめのはは
 きよかなの空に 元氣よく
 学ぶみな小学校」
 「みどりみどりの野の原に
 金魚が泳ぐ
 いともさかやう歌うて
 さだささかやうあめのはは
 きよかなの空に ほんかに
 學ぶみな小学校」
 「けいけいけやうのなにかおそ
 子ぎの船がさかやう
 いともさかやうめぐる
 さだささかやうあめのはは
 きよかなの空に たましく
 學ぶみな小学校」

○学校の歴史について
教えて！
昭和40年4月1日、地域の人口増により上津役小学校を各章に配分しています。

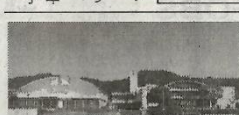
○校歌について教えて！
校歌の歌詞には、教育の三十二理念である知育・徳育・体育

地域と保護者に
支えられて
創立60周年

北九州市立
大原
小学校

設置年度 昭和40年
校 長 山内 哲也
所 在 地 北九州市八幡西区町
上津波東1丁目12番1号
児 童 数 259名

く教えて校長先生！ 学校のいろいろなことく



大原小学校 校舎
(写真のシライ 撮影)



毎日新聞に掲載されました!!②

前号でお知らせした「メダカ博士」の妙見先生による出前授業が、毎日新聞(6月18日朝刊)で取り上げられました。また、毎日小学生新聞(6月25日全国版)でも取り上げられました。

命の大切さ伝える「メダカ博士」

妙見さん(右から2人目)が持参したメダカの卵を顕微鏡で観察する子どもたち



「メダカが絶滅危惧種になっていることを皆さんは知っていますか」。小学校の理科室で白衣に身を包み、低音の優しい声で語りかける。子どもたちから「メダカ博士」と呼ばれるこの男性は、八幡西区の妙見博士さん(77)。メダカを通じて命の大切さを伝える授業は、開始から10年になる。【成松秋穂】

妙見博士さん 出前授業10年

北九州市立大原小学校(同区)で5月、5年生クラス計40人を対象に開かれた出前授業。日本各地に生息する野生のメダカは、水環境の悪化により環境省のレッドリストで絶滅危惧種に指定されている。そんなメダカを飼うために必要な水や水草の管理、オスとメスの見分け方、周りの環境に合わせた体の色を変える「背地反応」など丁寧な説明に、子どもたちは時折「へえー」と相づちを打ちながら聴き入った。授業の目玉は、妙見さんが持参したメダカの卵の観察だ。当日朝に受精した卵から受精10日目の卵まで、1日おきに子どもたちが観察できるよう、妙

生態を解説 受精卵観察「子どもたちに 気づいてもらえたら」

見さんが自宅で毎日採取して準備。子どもたちは、順に顕微鏡をのぞき込み「すごい!」「こっちは目がある!」など歓声を上げた。藤原峻賢さん(10)は「顕微鏡で見たメダカはちょっと気持ち悪かったけど、10日間で卵が成長していき、こいと思っ」と笑顔で話した。山内登也校長は教科書の写真で学ぶのに比べ、子どもたちの目の輝きが全然違う。メダカは学校でも育てているが、受精卵を1日単位で管理することは困難で、出前授業はありがたい」と語った。企業や化学分野の研究開発に携わっていた妙見さんは、60歳で定年退職後、友人から2匹のメダカを譲り受けた。「1日見ても飽きない」とその魅力に引き込まれ、繁殖を繰り返して多いときは1000匹を飼育するようになった。出前授業は、スクールヘルパーとして関わっていた小学校で頼まれたのを機に、2014年から始めた。心臓の手術で入院した23年は授業ができず、この日は約1年ぶりの授業だった。「メダカの命は身近な自然環境問題。小さな命の連鎖を目の当たりにすることで、子どもたちは命の大切さに気づいてもらえたら」。現在は米寿を目標に「メダカ博士」を続けようと意気込んでいる。



子どもたちが顕微鏡で観察したメダカの卵